



---

# フェイクプレーン 観察日記

---

大本正

---

## まえがき

---

※注意：フェイクプレーンはあまり大きな動きはしないので面白味に欠けるかもしれません。宇宙人は実際には地球人であり、トバルカイン、エラド、マハラエルなどの名を持つ。ただ、彼らは宇宙に行ったり住んだりできるし、わかりやすいということで引き続き「宇宙人」と呼ぶことにします。

### ■まえがき

宇宙人は、われわれと同じ人類である。われわれと異なる点は彼らが超科学を極めているという点である。超科学を極めた彼らは永い年月を巡り巡って最終的に、人類は自然に囲まれて暮らすのが一番だということに気づいた人々でもある。つまり、彼らは超科学を元にしてSFに出てくるような、近未来的な都市を築いて暮らしているわけではない。

UFOを所有している宇宙人たちは、2千年くらい前から騎馬民族として暮らしている。スキタイ人、匈奴、鮮卑などがそうであるが、現在では多くの宇宙人がシベリア～中央アジアに住んでいる。日本人に似た宇宙人の正体はウィルタ族（オロッコ族）であり、インド人+北欧人に似た宇宙人の正体はカラシュ族である。

宇宙人は2万年前からUFOに搭乗し、火星と地球を往来し、あらゆる物質の原子核を直接核分裂させることでタナトスが築いた都市を焼き払ってきた人々である。しかし、超科学を極めた彼らは、ポールシフトを人工的に起こして大地殻変動を発生させ、海岸部を9日間海の底に沈め、タナトスの都市を直接核分裂させることで焼き払って多くの土地を砂漠化した。

そうやって何周も周って、彼らは遂に科学に対する盲目的な過信と、科学が生む利便性の追及はヒトを精神的に貶めることを知った。その結果、自然と共に暮らすことが本来のヒトの暮らしだということを実践している人々である。2000年前には騎馬民族として中央アジアに暮らし、現在ではカラシュ族（クウォスのトバルカイン）としてアフガニスタンの山奥に住み、一方でオロッコ族+ウィルタ族（オロクンのトバルカイン+エラド）がツングースに暮らしている。

宇宙人は、普段は遊牧民+農民+狩人として暮らしているが、時にはシベリアに赴き、数千年前にシベリアに建設された研究施設で超科学の研究にいそしんでいる。ただ、「彼らがシベリアにいるから会いに行こう」と考えても、そうやすやすと彼らに会うことはできないだろう。思考を読む装置を所有する彼らは、よからぬ人間が接近した場合、すぐに隠れる。そして彼らが隠れた場合（テレポートしたり、透明になる）、現代人が彼らを見つけることは到底不可能だ。

また宇宙人は、先祖が生んだ超科学を自分たちが悪用することがないように、日本の山奥で修験者

として厳しい修行に励み、煩惱に負けて科学を悪用することがないように、常に精神を律することを考えている（現在の修験道の聖地は資本主義に汚染されているため、宇宙人は人跡未踏の山に新規の修験道の聖地を築いている）。彼らは、科学の番人として先祖の遺産を継承し続けている。以上が彼らの日常生活である。

筆者の動向を見守っている宇宙人は主にカラシュ族（クウォスのトバルカイン）だと考えられる。別著「ダヴィデの一族」を見ていただければわかるが、カラシュ族はイエスを生んだ一族であり、ハザール帝国時代はハザール王を務めながら、唐の王族の勧めで朝鮮に居住しつつ、隣国日本で修験者として日夜、修験道の聖地とされている山岳地帯で身心共に鍛えていた人々である（この間に鹿島神社を創建し、桃太郎として鬼退治をし、万巻として芦ノ湖の九頭龍崇拜の人身御供の神官たちを皆殺しにしている）。

その後、クウォスのトバルカインはグルジア王としてグルジア王国を治めていたが、グルジア王国時代のようにまた民の前に登場し、人類を正しく導いて欲しいものだ（既に、プーチン大統領をはじめとしてロシア政府にはカラシュ族が閣僚を務めているのかもしれない）。



2020年1月14日のフェイクプレーン。2機で飛んでいる。肉眼で見るともっと大きく見えるが、写真に撮ると米粒にしか見えないのが難点だ。撮影場所は静岡県西部某市である。



画像の2機は上の画像と同じ機である。並んで飛びながら西へ進んでいる。撮影場所は上の画像と同じ場所である。

2020年1月14日②

---



某市の川原を歩いていたら3機飛んでいた。彼らは大体農薬の危険度に合わせて数を増やす。し

かし、北の空を東から西へ飛んでいるので安全だということを示している。





上の画像の2機と共に現れたが、少し遅れてきた1機を写した。



別の場所で撮った1機の画像である。これは比較的低空を飛行していた。つまりあまり良くないことを意味している。英語では「ふう、あぶなかった」と言いたいとき「That was close」と言います。closeは近いという意味ですが、英語圏の人はこういう風にcloseを使うことがあるわけです。宇宙人はそれをマネしているのだ。

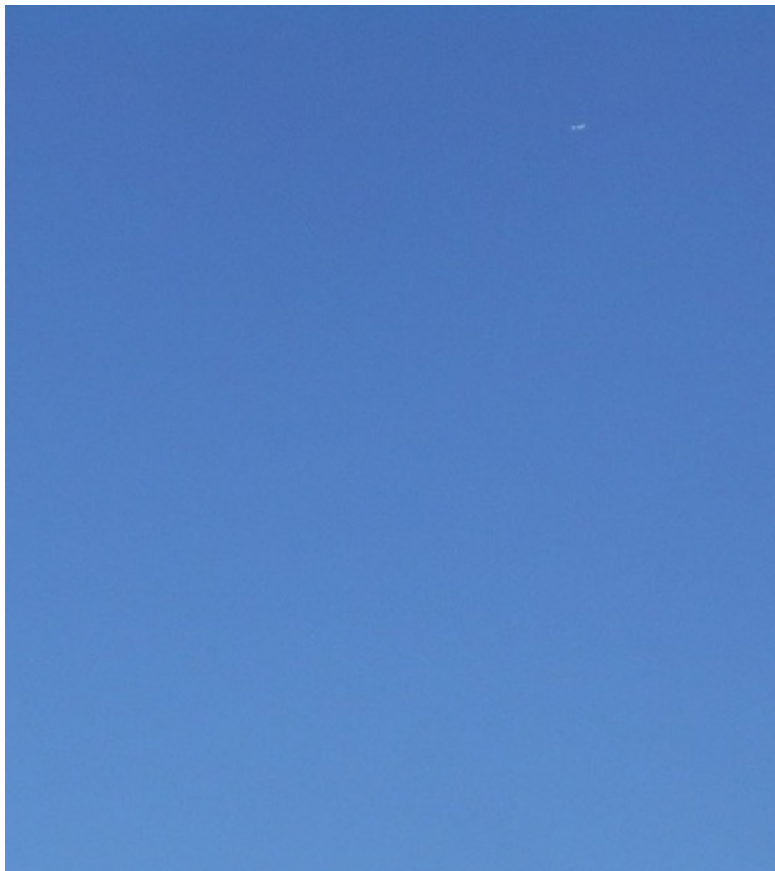
逆に英語圏の人は「順風満帆」のことを「So far so good」と言います。直訳すれば「遠ければ遠いほど良い」である。宇宙人はこれもマネし、彼らが遠くを飛んでいれば安全だということを示している。

今日午前中、自転車を引きながら静岡県西部某市を西へ向かっておりました。冬は常にそうだが、今日も北の空をフェイクプレーンが何機も代わる代わる出現し、飛んでおりました。農薬汚染度が高い地域を筆者に教えるためである。自衛隊の練習機が飛ぶときは、浄土真宗+曹洞宗信者による集団ストーカー（イヤガラセ）を教えてくれている。

今日は、帰りに面白い現象を久しぶりに目撃したが、あまりに機体が薄く。「撮ってもどうせボヤける」と思い、撮るのを断念した。状況はこうである。

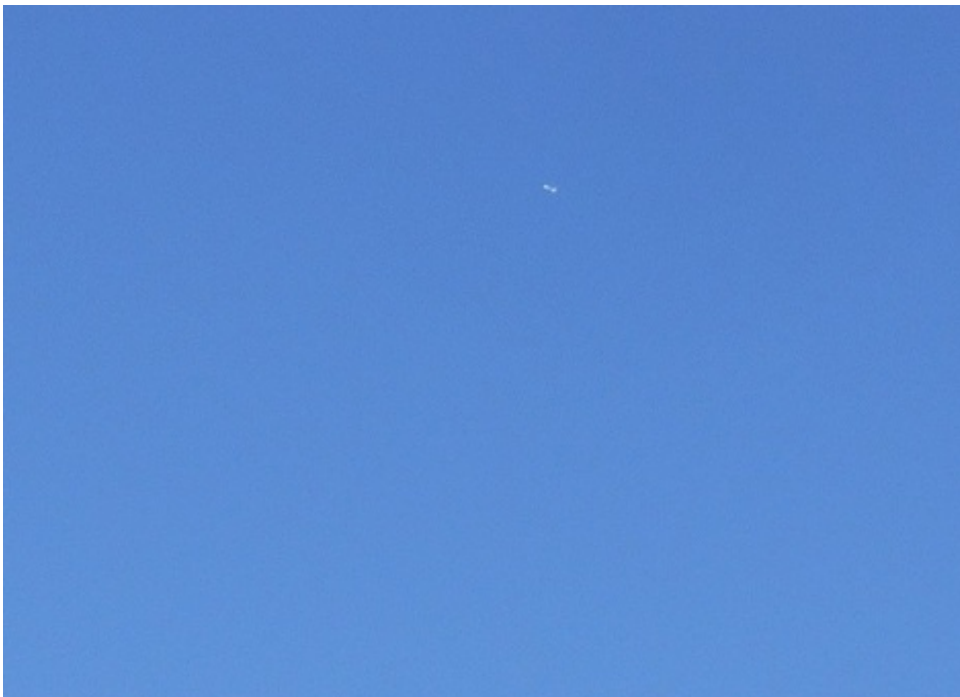
田んぼの真ん中の農道を自転車で通過中、ふと北の空を見ると、3機が飛んでいた。2機が東から西へ、1機が西から東へ飛んでいた。フェイクプレーンが西から東へ飛ぶときは農薬の汚染がひどいことを教えてくれている。おもしろかったというのは、東から来た2機の間を、西から来た1機が飛んでいったということである。

こういうときたまに、東から来た機がレポートしたりバックしたりするのだが、それはなかった。彼らがレポートするとき、それは「どうだすごいだろ」という自慢を意味しない。ひけらかしでもない。彼らのレポートは「一瞬でそこから消えろ」、バックは「今すぐ引き返せ」を意味する。レポートを見ればみなさんもびっくりするだろうが、筆者は、レポートよりもフェイクプレーンがバックしたときの方がびっくりしましたw 飛行機みたいなものが飛んでて急にバックするんですから、想像できますか？フェイクプレーンは明らかにUFOが飛行機に化けているわけだ。





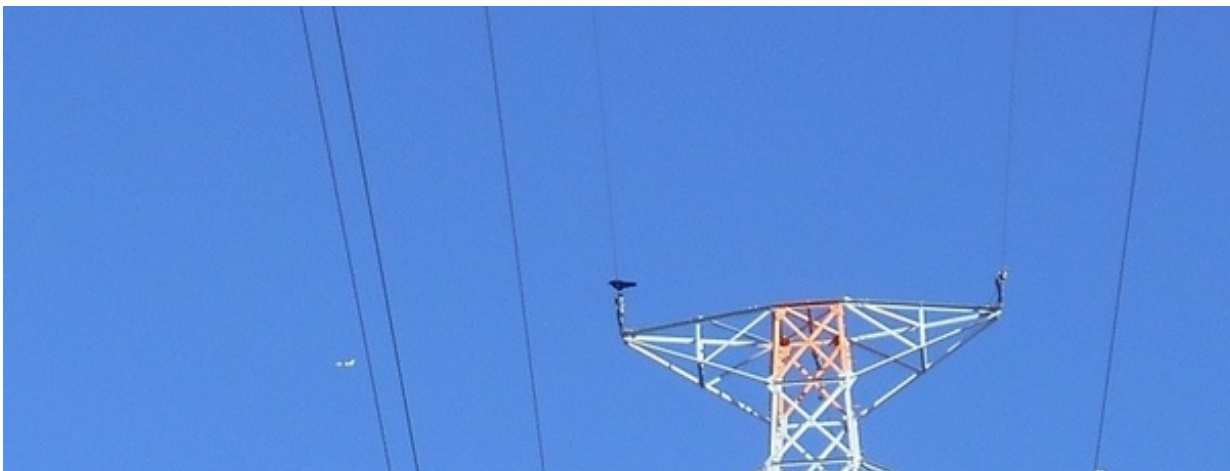
某河川に差し掛かったとき、撮影した。いつものことながら米粒にしか見えない。







これはどこを撮影したのか覚えていないが、パチンコスロットの近辺らしい。翼の影のせいで円と円がくっついているように見える。







これはけっこう低空を飛行しており、農薬的には汚染度が高めということを意味している。



どこで撮影したか忘れたが、アップで撮ってみた。





某市は坂が多いのだが、坂を上っている時に撮影した。





これもどこで撮ったか忘れたが、アップで撮った。



クレーンの近くを飛んでいたのが撮影。



電線の間から撮影。





特におもしろみもないのだが、笑 それでも彼らは農薬の危険を教えてくれている。言葉で直接伝えないのは、筆者を育てるためである。彼らの言葉は暗号、詩と同じで王の言葉である。彼らは、稀代の映画作家、黒澤明、小津安二郎、橋本忍、ミケランジェロ・アントニオーニ、アラン・ロブ＝グリエ、マルグリット・デュラスと同じように考えている。つまり「生活圈を異にする者同士が簡単に会おうべきではない。それは破滅を招く」と。どう考えても常に筆者の視界に彼らがいることは偶然とは呼べないがw それでも彼らは偶然を模して「ぼくらは飛行機に乗っているんだ」ということにし、フェイクプレーンを使ったいろいろなジェスチャー（機体の濃度、飛行速度、飛行高度、遠いか近いか、どこからどこへ向かって飛んでいるかなど）や、ケムトレイル、昆虫、鳥類などを使って農薬の危険度を教えてくれる。



この画像では、めいっぱいアップにして撮ってみた。飛行機には見えません。



フェイクプレーンの特徴は不自然なほど機体が白ということだ。太陽光を反射するとピカッと光る。





黒いものはレンズに付いたゴミのようだ。



某市の河川の上を飛んでいる。ここの川は土手に芝生が植えられ、ゴルフ場みたいだ。まさに、ゴルフ場のように農薬もばんばん撒いているのでフェイクプレーンが出現したようだ。「おい、そこは除草剤で汚染されてるぞ。まあ、一時的に通過するのはいいが」ということだろう。





携帯基地局に接近するフェイクプレーン。別に意味はない。しかし、この携帯基地局は近づいたり、付近に長時間いると脳を直接つかまれているようなイヤな頭痛とめまいがする。現に付近の住民はふらふらであり、携帯基地局で作業をしている作業員は死にそうな顔をしている。



すすき越しのフェイクプレーン。別に意味はない。近くの山（歩道と車道が整備されている）を登っている時に撮影した。



消えそうなほど色が薄いフェイクプレーン。見えるだろうか？本当に薄い。しかも本当は2機撮ったのだが、というか2機写っているのだが、もう1機は薄すぎて見えない。フェイクプレーンが消えかかっているのはレポート直前を意味する。そしてレポートは「すぐにそこから離れる」を意味するが、「消えそう」なので「そこからすぐに離れたほうが良い」ということだろうか。





宇宙人は早期警戒機を模したフェイクプレーンだけでなく、自衛隊練習機を模したフェイク戦闘機、セスナ機を模したフェイクセスナ、ヘリコプターを模したフェイクヘリで出現することがある。フェイク戦闘機以外は、いずれも異様なほど機体が白いのが特徴だ。ただフェイクヘリは頭がなんかオレンジである。

数年ぶりにフェイクヘリを見た。以前、山の方を散策していた時にはよく見かけたものだ。フェイクヘリは速度が速いので撮影は初めてである。

このヘリはおかしい。ヘリはちょっと離れていてもプロペラ音が響き渡るものだが、このフェイクヘリは全く音がしない。フェイクプレーンも音がしないが、フェイクプレーンでもフェイクヘリでも、「音がしないぞ」と指摘すると宇宙人はなぜか音を出すことがある。負けず嫌いなのだろうか？w それにしても、音もなく空を滑るように横切っていく様子はUFOにしか見えない。フェイク戦闘機の場合は、音を出すのが任務のようなところがあるので、ものすごいでかい音を聞かせてくる。





フェイクヘリ2発目。東から西へ飛んでいる。



フェイクヘリ3発目。アップにして撮ったがあまりヘリに見えない。UFOにしか見えない。肉眼ではもっと大きく見えるのだが、残念なことに写真に撮ると小さくなる。なぜだろう？宇宙人が撮られたくなくて何らかの操作しているのだろうか？もちろん彼らは分子の次元であらゆる物質を操ることができるので不可能ではない。





雑誌ムーなどを読んでいる方はMIB（メンインブラック）のことを知っているだろう。UFO目撃者に接触し、UFOを目撃したことを口外しないように脅す謎の機関として知られている。筆者はMIBに会ったことはないが、画像のようにMIBのものと思われるブラックヘリにはよく遭遇する。彼らはいったいどこから来るのだろうか？アメリカ軍基地でも自衛隊基地でもないならどこから来るのだろうか？





MIB専用の秘密基地が日本中にあるのかもしれない。ふつうこんな真っ黒なヘリとかありますか？軍関係のことには明るくないので何とも言えないが。まあ、アメリカ軍のヘリなら近くに自衛隊浜松基地があるのでそこから来ているのかもしれない。



アップで撮ったブラックヘリ。はっきり撮れている。宇宙人のフェイクプレーン、フェイクヘリなどはどんなにアップで撮ってもぼやけるのだが、ブラックヘリは普通の人間が作ったものなのでアップで撮るとぼやけずに普通に撮れることがわかる。こういうことから、フェイクプレーンはいったい何なのか？その謎が一層際立ってくるのがおわかりだろう。







今日も某市を北に向かって散歩していた。家を出てしばらくすると、上の画像のように自衛隊のヘリが無駄に出現した。浜松基地を出たヘリが筆者を監視しているように見せかけて圧力をかけているところだ。もう慣れたのでどうということもないが話のタネに撮影。こいつらじゃ国民なんか守るわけねえなw 仏教の坊主と信者しか守らない。その後、自衛隊のヘリの写真を撮ったのが原因か不明だが、街中で警察に職質されたw



川原の土手を散歩中、アップで撮ったフェイクプレーン。



続けてアップで撮ったフェイクプレーン。



某市の北で捉えたブラックヘリ。このブラックヘリは自衛隊所属のヘリのようだ。ネットで調べると調査用のヘリだという。このブラックヘリは10年前から外出時によく見かけたが、その頃から筆者に精神的な圧力をかけるために飛んでいたわけだ。

今日は2回も別の場所で遭遇したが、日によっては三度出ることもある。これはあきらかに個人の人権を無視した組織的な監視といってよからう。



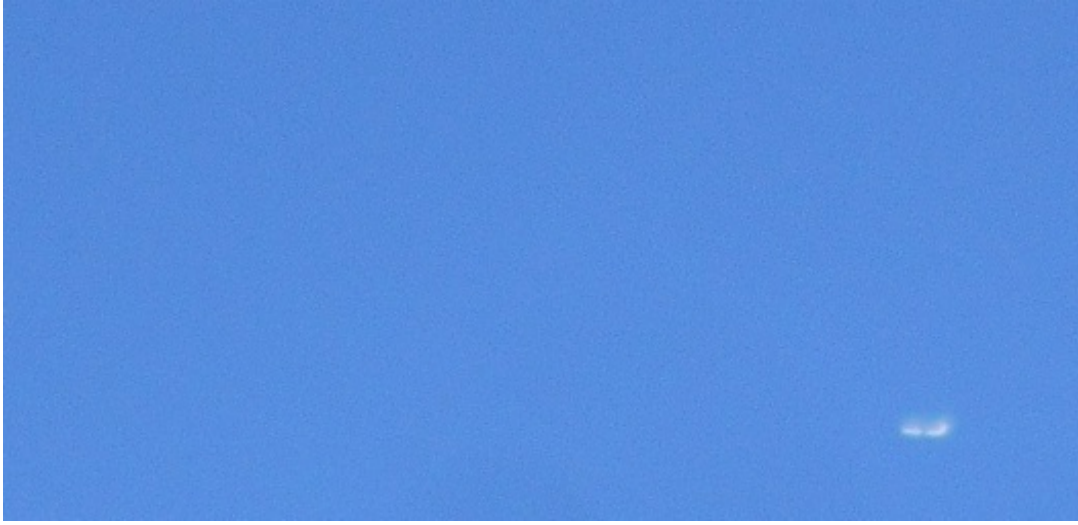
ブラックヘリ。二発目。ブラックヘリは宇宙人のフェイクプレーンが飛んでいる際に出現したが、怖くてフェイクプレーンに近づくこともできないようだ。

じつは4年ほど前、山の方を散策中に1機のフェイクプレーンがとある山の上空に出現した。このとき、ブラックヘリが筆者に圧力をかけるべく背後で飛んでいたが、フェイクプレーンを見つけたブラックヘリが山の上空に浮かぶフェイクプレーンに接近を試みたのだが、2機目のフェイクプレーンがテレポートでフッと眼前に出現すると、びびったブラックヘリが迂回したのを目撃したことがある。笑

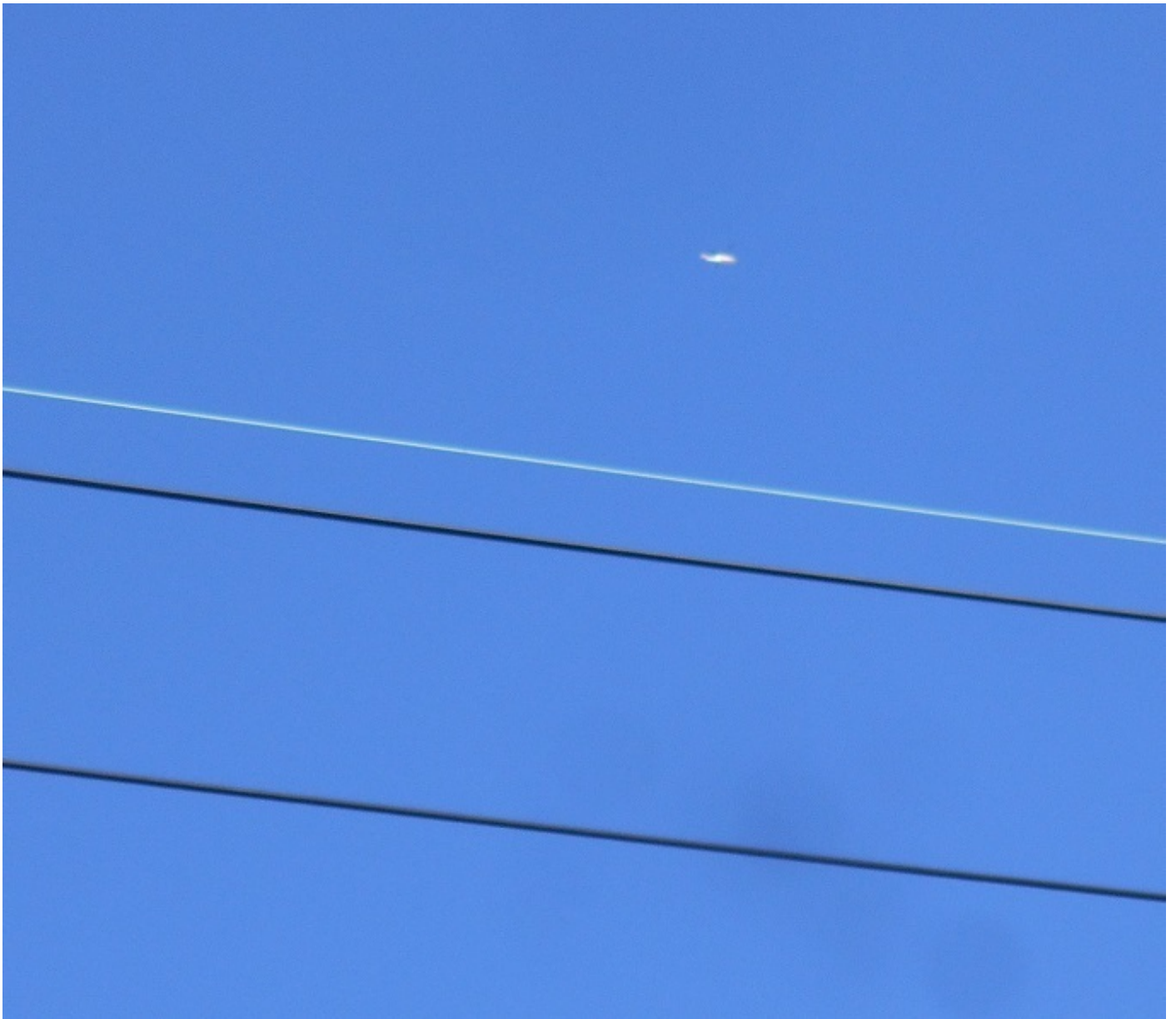




「着陸するのか？」と誰もが思うような、かなりの低空飛行をしていることがわかる。筆者に付きまとして「おれたちが自衛隊をあげておまえを調べているんだ」という精神的圧力をかけたいようだが、それ以前に筆者の体にGPS、レーザー盗聴、レーザー盗撮の機能が搭載されたマイクロチップが両肘、両膝の裏に埋め込まれているため、ブラックヘリによる調査などは、ただの猿芝居だということが筆者にはわかっている。



フェイクプレーンのアップ。どうしてもぼやけている。



フェイクヘリである。最近はよく見かけるようになった。昨日などは自宅上空を飛来したが、カメラを取りに行く暇もなくあっという間に通過した。今日のフェイクヘリはヘリのような音を出していた。

かなり近くを飛んでいたのではっきり写るはずだが、やはりどうしてもぼやけている。今回くらいの距離ならブラックヘリだとちゃんと写るのだが。ゴーストプレーン（ファントムプレーン）、ゴーストヘリ（ファントムヘリ）と呼んでも良いかもしれない。